

## 論稿六ノ二

# ニュー・イングランド地震一七二七年

## (イギリス領その二)

### 第一章 マサチューセッツ最高法務官ダドリーの地震記録

『ロンドン王立協会哲学紀要』には一七二七年のニュー・イングランド地震について三つの証言が収録される。ポストン在住ベンジャミン・コールマンの書簡、ロクスビュリー在住ポール・グドリーの報告、ニューベリー近郊マイアス・フランドの日記がそれである。なかでもマサチューセッツの最高法務官ダドリーの地震記録はかなり長文にして委細である。

一六四七年に出生したポール・ダドリーの祖父と父は、二代続けてマサチューセッツの植民地総督であった。ハーバード・カレッジを卒業し、ロンドンのミドル・テンブルで法律を学んだポールは、帰国して法務分野に進み、やがて一七〇二年から一七一八年までマサチューセッツ州最高法務官の地位にあった。自然学者としても知られ、もっとも早くから王立協会会員として推挙されたひとりである。①

ニュー・イングランドにおいてイギリスの植民開始より一七二七年  
十月二九日までに発生した数次の地震に関する報告

① Dudley, Thomas in *Encyclopaedia Britannica* 1911. online.

Patline Mair, *The Pope at Harvard : The Dudleian Lectures, Anti-Catholicism, and the Politics of Protestantism.*

in *Proceedings of the Massachusetts Historical Society, Third Series*, Vol. 97(1985), p.17.

拜啓。さる十月二九日の夜当地で発生した怖るべき地震については、公的な印刷物より当然報告を得られたと存じます。とはいえ、会員のひとりとしてその委細を王立協会にお伝えするのが義務と考え、これを受理頂けば幸いと存じます。

この国にしばしば地震が生じることは確かです。いまを去るほぼ百年前、イギリス人による植民の開始以降、いつもそのように警告されました。ここでの印刷物や確かな記録には、いくつかの大地震が誌されています。歴史に見出される巨大地震で、本年のそれと似通う揺れは一六三八年六月二日に発生しました。(厳正な貴紳である執筆者によれば)「これこそ怖るべき大地震であった。震動に先立つて遠くからの雷鳴のごとく、轟々たる噪音と低い雑音が聞える。それは北方から来て、南方へと走り、噪音が近づくにつれ、大地が揺れ始めた。ついには鉢や瓦が落ちるまでの強さとなり、驚愕して人々は戸外へと逃げる。震動が激烈かつ大幅であるため、戸外に出た者も、直立できず、支柱などで身を支えた。半時間ほどのちに新たな噪音と震動も起きるが、当初のものほど大きくも強くもなかった。港湾の船舶もこのため揺れた。」ついで一六六〇年一月三一日にも大地震が起きました。一六六二年一月二六日午後六時頃地震が発生して、家々を揺るがし、住民を街路へ急がせて、煙突がいくつか墜落します。同じ日の深夜と翌日の朝にも揺れがありました。

一六六五年、一六六八年、一六六九年と地震が続き、それ以降もときに震動が記録されるものの、大きなものではありません。しかし、若干の国々と同じくニューイングランドは、大地の異常な変動による脅威と被災を蒙り易いと信じています。

さてこの国の全域にわたり住民を驚愕させ、恐怖させた今回の怖るべき地震について可能なかぎり最善の報告を果しましょう。最初に着手すべきは地震に先立つ天候または気候の記録です。この年一月と二月は温暖で、寒い日数を除き天気も良く、地が霜に覆われるのも皆無でした。三月初めに大雪が降り、寒くなりましたが、ほどなく和らぎます。十一日四時十五分に日食十二分の五となり、機器なしに私はほぼそれを確認。その月末まで快適な気候が続いて、ときには雨も降り、いちどは雷光も発しました。四月はおおむね陽春となり、月初めと後半に相当の雨量をみます。五月初めも快適な気候で、九日、十日、十三日は大雨。十八日に霜が降りて、二四日と二五日は寒く、以後月末まで空気が乾燥します。六月上旬も同様で、月末までに雷が数度響きます。七月も同様ですが、各地でにわか雨が発生して、全般的に非常に乾燥し、雷鳴と雷光が頻発しました。月末の三日間は猛暑となつて、昼間は仕事も旅行もできず、夜は眠れぬ有様です。八月初旬も猛暑であつて、なかでも一日は夕方から夜中まで水平線一帯にたえず走る雷光。あまり前例も聞かず、強い雷鳴ではないが、怖ろしく思われました。十日まで乾燥が続く、その後地域全体に大雨が降り、月まで暑さが続いて、九月中旬なお暑さを感じます。九月十六日北東から強い嵐が襲い、いまだ記録されぬほどの強烈さで住宅や納屋を破壊し、果樹園や森林の樹木を無数に倒しました。あとには大量の雨。十一月地震に先立ちかなりの寒さ。二三日は南の風でやはり大量の雨。二六日夜に強い霜が降りました。二八日北西の風で寒さ。二九日主の祝日にして、北西の風やや弱いものの、寒く感じます。夕宵晴天にしてきわめて静穏でした。

この手短な氣象日誌によつて、地震に先立ち我らの地球がいか配備されたかを、ある程度識者は推断できるでしょう。第一には長期の乾燥と非常な熱氣で大地が多孔性となつて、發散する物質や熱した蒸氣が充満します。以後それらは大雨と霜に遮断されて、通常の静穩な通路、すなわち地球の孔穴や空洞によつて出られず、ほかの方途できわめて猛烈に發散するのです。しかし、いまなお地震の本質あるいは成因について哲學者たちの同意が得られぬいま、今次の震動がいかなる種類のものか、第二の推論に進みます。(スコットランドの哲學者)ギルバート・ジャックは著書『自然界』において地震の種類を四つに区分しました。アリストテレスおよびプリニウスに同意して、彼は第一の種類のマリアアの寒熱に似た震えまたは揺れとします。当地では地震の全域に關して大地の裂け目も龜裂も耳にしません。外国ではしばしば地盤があるいは隆起し、あるいは沈下したと言われ、その真偽を確かめたいと思っています。なぜなら、相当の高さに隆起したならば、家屋がかならず倒壊し、断層から大量に發散したはずです。アリストテレスとプリニウスが脈動または間歇的動揺と呼ぶ大地の異変はないのですが、連続した揺れや震動は感じました。したがつて、今次の地震は第一の種類の属し、地球のどこに位置するかな係わりなく生じたものです。戸外では煙突や石堀などは若干崩れたこと、屋内では皿などが床に落ちたことだけが、他と異なる現象です。これについては震動の程度を報告する際に再度語りましょう。

ニュー・イングランドにおける地震が第一の種類に属することは、これに伴う噪音によつても立証されます。震動は噪音を發生させ、地震に先立ち、あるいはそれと同時に音響や轟音が聞えることが、ここに提示する第三の事項です。實際非常に怖ろしい現象で、戸外よりも屋内で一層強く感じられるようです。ある人々はこうした轟音を雷鳴を思い、他の人々は舗道や凍土を走る馬車や荷車の響きに喩えました。また、隣人

のひとり窓辺の馬車から發射された彈藥をそれに連想しました。①

---

① Paul Dudley, An Account of the several Earthquakes which have happ'd, since the first Settlement of the English in that Country, especially of the last, which happ'd on Octb. 29. 1727. philisophical Transactions, volume 39 (1735). pp.63-73.